第六回福原徹演奏会

徹の笛

FUKUHARA TORU Recital vol.6

本日はお忙しい中ご来場いただき、誠にありがとうございます。

2001年の初回から数えて、今日で六回目のリサイタルを迎えることが出来ました。

これも皆様方の御指導御鞭撻の賜物と、厚く御礼申し上げます。

たびたびプログラムに書かせていただいております「笛には未知の可能性があると信じています… 新しい笛の音楽を作るためには、まず演奏家が作曲し演奏しなければ」という考えや、「笛を通して音楽を見つめ直す事で邦楽の発展、さらには新しい音楽の創造に、ほんの僅かでも寄与できないだろうか」と夢見る気持ちは、今も全く変わっておりません。

全てが試行錯誤の連続です。

そんな「試行錯誤」に今回も膨大な時間をかけて付き合って下さった中川俊郎さん、そして多くの皆様にご協力いただきました。また、御支援いただいた邦楽振興基金、御後援いただきました各位に心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、ご来場の皆様にあらためて御礼申し上げます。本日はありがとうございました。

福原 徹

●
PROGRAM

作曲者不詳　長唄めりやす　明の鐘

◉篠笛――福原 徹

福原徹 作曲　solo 03　［初演］
舞

◉能管――福原 徹

――――休憩――――

J.S.バッハ 作曲
福原 徹・中川俊郎 編曲

ゴルトベルク変奏曲 BWV988

クラヴィーア練習曲集。
二段鍵盤のチェンバロのためのアリアと種々の変奏曲からなる。
愛好家の心の慰めのために。

◉篠笛・能管――福原 徹
◉ピアノ――中川俊郎

明(あけ)の鐘

「宵は待ち」とも呼ばれている、作曲者・作曲年代不詳の長唄めりやす。ゆっくりで短く手順もやさしいので、初心者のお稽古によく用いられる。しかし、歌詞を意識して吹くと一挙に難しい曲となる。

今まで「ゆき」「黒髪」「もみぢ葉」をソロで吹いてきた。古典の曲を篠笛の独奏で吹く――その旋律の美しさや古典の持つ味わいを笛だけで表現できるのか。唄・三味線に合わせて吹く本来の古典演奏と、新しい曲を創作することの間(あいだ)を埋める試みでもある。

この曲を吹くたびに、チャンよいわァまァちィ… と三味線を爪弾きながら唄う師匠の声が、聞こえてくるような気がする。

（歌詞）宵(よい)は待ち　そしてうらみて
暁(あかつき)の別れの鶏(とり)と皆人(みなひと)の
憎まれ口(ぐち)な　あれ啼(な)くわいな
聞かせともなき耳に手を　鐘は上野か浅草か

solo 03

笛の独奏曲をたくさん作ることを目指して―昨年からスタートしたsoloシリーズ。

今回は「舞」をテーマにした能管の曲を一つ。

先行しているduoシリーズは、昨年ようやく05。二桁の目標には、まだ遠い。

ゴルトベルク変奏曲

J.S.バッハ（1685～1750）の生前に出版された「クラヴィーア練習曲集」と称する四つの曲集の最後を飾る、チェンバロのための作品。「ゴルトベルク変奏曲」というタイトルはバッハの死後につけられた通称。

冒頭の「アリア」から始まり30の変奏を経て、再び「アリア」に戻るという計32曲から成る。「アリア」が全体の主題となるが、その美しいメロディではなくそれを支えているバスの動きが各変奏の基礎になっている。「アリア」の長さは32小節、全体の曲数も32。「アリア」は16小節ずつ前半後半に分けられるが、曲全体も16曲+16曲という構成。また30の変奏には第3、第6、第9… と3曲ごとにカノンが現れ、そのカノンは同度から二度、三度… と音程が開いて行き第27変奏で九度に達し、最後の第30変奏は民謡を歌い重ねる「クォドリベット」となり、「アリア」へと回帰してゆく…

というような、きわめて数学的な秩序で組み立てられているのだが、私にはそのような論理的な印象は微塵も感じられない。

昨年のリサイタルのために「月光と海月」を作曲している時、突然、何の迷いもなく「今度はゴルトベルクだ！」と思ってしまった。

バッハの音楽は、先ほど述べたような厳格な構造が特徴なのであろう。しかし私は、バッハのメロディには何度繰り返して聞いても飽きない、と言うより、もっと聞きたくなる、あるいは自分で歌ってみたくなる、何とも言えぬ「歌ごころ」のようなものを感じる。笛でバッハを吹くということは、そういうものをバッハの音楽から引っ張り出そうとする作業なのかも知れない、とも思う。

しかしながら、実際にバッハを笛で（フルートやリコーダーではなく）吹くのは大変困難だ。さて、どうするか。

中川さんには2002年以来いろいろ無理をお願いしてきたが、その中でもたびたびバッハを取り上げて来た。今回も連日、「ああでもない、こうでもない」と、濃密な時間をご一緒していただいた。ゴルトベルク変奏曲は旅のような感じがすると常々思っているのだが、その時間も旅そのものであった。

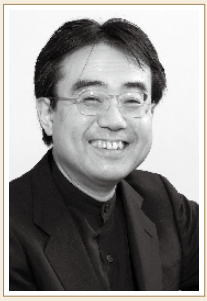
今宵のゴルトベルクは、過激に、楽しく、美しく。

［福原 徹］

写真 大窪道治

福原 徹（ふくはら・とおる／邦楽囃子笛方）

1961年東京生まれ。六世福原百之助（のちの四世宗家寶山左衛門・人間国宝）に入門、福原徹の名を許される。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。邦楽囃子笛方として、長唄・箏曲などの演奏会、日本舞踊、歌舞伎の舞台、放送、海外公演等で古典演奏活動を続けると共に、笛を中心とした作曲に取り組む。
2001年第1回演奏会「徹の笛」（津田ホール）を開催、平成13年度文化庁芸術祭大賞（音楽部門）を受賞。
2002年～2003年、新作連続演奏会「徹の笛 in MUSICASA」を隔月で連続六回開催。2004年第2回、2006年第3回「徹の笛」（紀尾井ホール）を開催。
一昨年よりリサイタルシリーズを再開、2012年第4回、2013年第5回「徹の笛」（王子ホール）を開催。
今年で第20回を迎えた洗足池の野外コンサート「春宵の響」では、初回から企画構成にも携わる。
東京藝術大学、有明教育芸術短期大学、清泉女子大学等の非常勤講師を歴任。NHK文化センター（青山、浜松、名古屋、柏、岐阜）講師。また、東京、浜松、彦根などで指導にあたり「百笛会」を主宰。長唄協会会員、創邦21同人、NPO法人大田まちづくり芸術支援協会アドバイザー。
著書：「やさしく学べる笛教本」（2003年）。
ＣＤ：1997年作品集「徹」、
2007年コンサートライヴ盤「徹の笛」、
2009年二枚組の作品集「lift off」を発表。



中川俊郎（なかがわ・としお／作曲家・ピアニスト）

桐朋学園大学作曲科卒業。作曲を三善晃、ピアノを末光勝世、森安耀子に師事。武満徹主宰「Music Today 82'」10周年記念国際作曲コンクール第1位。09年サントリー芸術財団主催による全曲オーケストラ作品による個展開催、この成果に対して第28回「中島健蔵音楽賞」受賞。他に村松賞、CM.の「ACC賞」等多数。
日本現代音楽協会副会長、日本作曲家協議会理事、作曲家団体「深新會」副代表。お茶の水女子大学非常勤講師。双子座三重奏団メンバー。他に歌手の松平敬、木村弓などとコラボをしている。

2014年11月28日（金）7時開演　銀座 王子ホール
●後援：公益財団法人 日本伝統文化振興財団／（有）邦楽ジャーナル／邦楽の友社
●助成：邦楽振興基金
●制作：日本伝統音楽振興会 黒河内 茂
●舞台監督：清野正嗣　●協力：加藤繁治　●デザイン：長田 彰
●主催：福原 徹

次回のご案内	徹の笛 **第七回福原徹演奏会** 平成27年（2015年）11月30日（月）　紀尾井小ホール